
夜を駆ける

kuroyumi

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を駆ける

【Nコード】

N4842P

【作者名】

kurouyumi

【あらすじ】

屍食鬼って知ってる？

人の肉を食べるケモノなんだって。そいつらの写真撮ったらいいお小遣いになるんだって。

怖い？

ビビってどうすんのさ、最近流行ってんだよ。やってみなよ。

ほら、そこにそんな馬鹿が一人いるよ。

写真と勇気

日本各地に屍食鬼^{グール}と呼ばれる化け物が出現したのは今から10年前。

キツカケは連続猟奇殺人事件だった。

死体は無残に荒らされ、残された骨は毒々しく白濁色に光っていたらしい。

そんな事件が全国で相次ぎ、マスコミは警察の無能さをわめき、市民たちは身近にせまる死とスリルに狂気した。

そんな時とある報道局にある写真が持ち込まれた。

そこにうつるのは人間の身体に口を突っ込み、肉をあさるハイエナのような生き物の姿。

複数体写っていたがどれも灰色の毛並みとのこぎりのようにならぶ歯を持っていた。

あまりにまがまがしく、あまりに残虐な写真だったために持ち込んだ高校生が一時精神病院に隔離されるという騒ぎまで起こった。

このことが報道されると全国からその化け物の写真が送られ、ついに陸上自衛隊がその生き物の撮影に成功したことで、人間の天敵として認定されることとなった。

政府は陸、空の自衛隊を使ってその生物を探し、人海戦術での殲滅を目指し奮闘するが

いまだにぱっとした成果があがっていない。

今の所しているのは陸自の歩兵隊による市民の安全の確保、それと危険有りと判断した時には外出禁止令を出すことに留まっていた。

ところが政府の思い通りに市民が動かないのは古代から現代に進歩しても同じらしい。

特に若い世代はその傾向が強い。

今、高校生たちの間で流行っているのは外出禁止令が発令された後ケータイでもカメラでもいいが、外に出て屍食鬼の写真を撮ることだった。

犠牲者は後を絶たないし、大人は馬鹿げてると言うが、ゲームよりパソコンよりも生活にスリルと興奮を与えてくれる最高の”遊び”に夢中になった。

高校生冬月氷善ひつゆもその1人だった。

ケータイ片手に1人で夜の道に行く。仲間を連れずに1人でやるのが暗黙のルールだ。

銃を手に物々しくあたりを見回す陸自を尻目に絶好のポジションへと向かう。

目指すは、廃寺。

もし、屍食鬼の寝床を見つけたら、写真はTV局。情報は自衛隊でいい小遣い稼ぎになる。

隣町の高校生がとった写真のある新聞社が10万で買い取った話は藁に火が燃え移るよりも早く広がった。自衛隊も屍食鬼の住処を報告すれば報奨金を出す、と市民をたき付けるようなことを言ってる。住職の失踪した寺は誰にも見向きされず、無様な姿をさらしていた。

昼間でも足ばやになる場所。夜、しかも人を襲う化け物がいるとなればなおさら……。

時折吹く風は死神の息吹のように生暖かい。

冬月は身を低くし、息を殺して横になった。

腹から冷気がぞわっと伝わってくる。ケータイの準備を万全にして目を皿にしあたりを見回す。

張り込みの刑事よろしく奮闘してみたが屍食鬼どころか猫一匹でてこない。

明日の学校のことと寒さが思考に割り込んでき始める。

そろそろ引き上げるか。そう決めて腰を上げようとした時、突如銃声がとどろいた。

眠くなつた頭を覚ます音。そして危険が近くにいるという証拠。
冬月は再び横になった。学校も寒さも、加えて自分の身の安全さ
え頭から転がり落ちた。

ケータイを握り締め、眼球が飛び出るほど目を開く。

心臓が必要以上の血液を送り出し、唇が砂漠のようにカラカラに
なる。

さつと何かが視界の端に飛び込んできた。

来た。

ボタンに力を込めようとしたが、ぴたつと止めた。

はっ、はっ、と荒い息を吐き、石畳の上でうめき声をあげるのは
人間だったから。

その姿を見て初めて冬月は自分がその時まで息を止めていたことに
気づいた。

ケータイを片手に駆け寄り、大丈夫ですか？と声を掛ける。

大丈夫なわけもないがそう聞かずにはいられないのが人の性^{さが}なのだ
ろう。

腕を押さえ、うめきながらも立ち上がるうとするその人はなんと
少女だった。

元の色はともかく、赤黒く染まるその服はずたずた。下はショー
トパンツというラフな格好だった。

冬月は自分の手に負える事態じゃないことを悟り、陸自を呼ばう
と振り返り口を開いた瞬間

目の前には無数の光の点が・・・点じゃない目だ。

血の気が引くという言葉の意味を体感した瞬間であり、最後の瞬
間でもあった。

屍食鬼の群れがむせかえるよだれの匂いと死を匂いを振りまいて
いた。

冬月の開いた口からもれでるのは精気のない、ただただ荒いだけ
の息。

彼を正気に戻したのは自分の背後で、同じく死を待つ少女の息遣

いだった。

死を前にして冬月の、男としての意地が目覚めた。

冬月はケータイを屍食鬼に投げつけると、棒を拾い上げ少女の前に立ちふさがった。

高校生活で無駄としか思えなかった剣道の授業が神々しく思えた。たとえ死をほんのわずかしかな伸ばせないわるあがきだとしても、だ。冬月はそれにすぎるしかなかった。

棒を振り上げ先に待つ運命を跳ね飛ばすように叫び声をあげようとした時

背後から口をふさがれ、首に温かいなにかが巻きついた。

それが少女の腕だと気づいたのと、冬月の意識が断ち切られたのは同時だった。

死神が腕を広げた。優しく、死という抱擁をかわすために。

グーラ

目を覚ますと、口の中によだれが溜つてることに気づき、一気に吐き気は限界に達した。

冬月が不快感を感じることが自分が生きてる証拠として受け取れなかったのも無理もない話だった。

彼の頭を駆けるのは死を振りまく屍食鬼グールの目と匂い、そして彼を背後から襲った少女のことだった。俺を生贄えさにして逃げたのか？冬月はそんな負の考えに縛られていた。

あたりを見回すがどう考えても病院じゃないし、あの世とも思えない。

さびたドラム缶と適当につまれた土嚢、湿気た木材に鉄パイプ。

そして生氣のない機械の山。

見上げるとはるか遠いトタン葺きの天井から太陽の光がまるで棒のように差し込んでいた。

後ろ手にしばられ、手首は擦り切れて血がにじんでいるのが分かった。

口に巻かれたさるぐつわはよだれでぐしょぐしょに濡れていた。

冬月が脱出をあきらめぐたあゝとなったその時を見計らったかのように昨夜の少女が現われた。

服装は昨夜と変わってないが顔色は良く、少なくとも昨夜よりは元気そうに見えた。

冬月は自分を襲ったことよりも人間に会えた喜びのほうに浸った。ところが少女はそれどころではないらしく、北極グマさえ凍えさせそうな目つきで冬月を見下ろした。冬月も彼女が手に持つナイフを見て凍りついた。

「助けてくれるんだろ？」。言葉にならない叫びを少女に向ける。少女は石になったようにぴくり、とも動かない。

その時、少女の背後で何かが動くのが冬月の目に止まった。

もがき、あがき、声にならない声をあげる。

グールだ。なぜ気づかない！？後ろを向いてくれ。

冬月の抵抗むなくグールはそつと音もたてずに少女に忍び寄る。そして・・・ついに伸ばせば触れられそうな距離まで近づいてきた。少女はすつと視線をグールにうつす。その目は冬月に向けられた氷の目ではなく

微笑みさえたたたえた慈愛あふれる聖母の目だった。

彼女は手を伸ばし、子犬でもなでるかのようにグールの頭をなでる。

グールもぐぐぐつとのどを鳴らし、目を細めて鼻面を手にくすりつける。

冬月は愕然とした。いや、吐き気さえ覚えた。

人の天敵とさえ言われた化け物が子飼いの犬のような体たらくをさらしているのだ。

彼女はかりかりとグールの耳の後ろを掻き、「あっちで待っててね」とささやくと

その尻尾が見えなくなるまで穏やかに見送った。

次に冬月に向けられた視線は聖母とはうってかわって死神の目つきだった。

冬月は希望が打ち砕かれた衝撃で頭がくらくらしていた。

人がいる。助かる。そんな構図はグールと少女とのやりとりでたち消えた。

いや、希望が打ち砕かれたわけじゃないんだ。理解できない状況に現実味のない希望など太刀打ちできようもない話なのだ。

「昨夜のことはあなたの完全な思い違いよ」

少女はふいに口を開いた。風のように透明でつかみどころの無い声だったが

冬月の耳になぜか強く引っかかった。

「わたしがグールに襲われたと思ったんですけど・・・これが
そう見える？」

少女の腕に巻かれた・・・医療品の端にも置けないような汚さだった
が・・・包帯をするすると

ほどき、その傷を冬月にさらした。

生々しい傷。爪や牙でつけられたモノにしてはやけに整った丸型の
傷。銃創だ。

しばらくして冬月の目が傷から逸らされたのを見て少女は包帯を
巻きなおした。

「陸自に撃たれたのよ。逃げ遅れた仲間を見て、飛び出したせいで
ね」

自嘲的な笑いを浮かべた。そのすぐあとに続いたのは獲物を手にし
た悪魔の笑み。

「人だとも思ったんでしょうね。急に撃つのを止めたわ。
もちろんそんな隙逃すわけも無い。切り裂いてやったわ、すばあ
ーとね」

ナイフを冬月ののどに当て、線を引く。血がゆっくりと流れ落ちる。
昨夜感じた恐怖とは違う、濃厚に現実味を帯びた死がゆつたりと
した足取りで冬月を包んだ。

血の付いたナイフを手に持つ悪魔を目の前に冬月はなすすべも無
くうめいた。

「わたしは人じゃないの」

1 + 1 は2です。そんな当たり前のことを諭すような口調で少女はつぶやいた。

「グーラって知ってる？ 雌の屍食鬼^{ゲール}のことよ。
それがわたし」

ナイフを器用に手の中で回しながら少女は続ける。

「雄も雌も基本的に身体の形も機能もハイエナに酷似している。
その中でわたしは異常なのよ。こんなどうしようもないくらい不便な姿で産まれた」

すらっとした自分の身体を忌々しげににらみ、吐き捨てる。

動けない冬月にさえ彼女の怒りが届いた。

歯をむき出しにして怒鳴る姿は獣というにふさわしい雰囲気を出していたがやがてため息をひとつついた。

「皆は殺せと言ったけど、わたしが反対したの」

突然湧いてきた希望の泉。流れ出るその水に冬月はすがった。
相変わらずの目つきだったが、少女のその目の奥に微かに光が見えた・・・気がした。

「なんで分かる？」

少女はぐつと冬月に顔を近づけた。
伸びるにまかせて伸ばされた彼女の黒髪が冬月の顔にかかる。

「生餌にするためよ」

狼のようなするどい歯はむき出しにして少女は笑った。

瞬間、さるぐつわを奥歯で噛み切り、冬月は怒鳴った。

「お前は俺に恩を感じてるんだ！」

ふいを付かれた少女がさつと後ろに飛びのき、ナイフを突きつける。
ここで黙ったら殺される。

命のやり取りなどしたことが無くても、ここが踏みとどまらなければならぬところだということぐらい冬月にも理解できた。

少女は冬月の剣幕に押され、じりじりと後ずさった。

「どうしてあの場で殺さなかったか？」

お前は俺に庇われたことで動揺した。だから止めたんだよ。殺すなつてな！」

「ふざけるな！なら今ここで殺してやる！」

「どうしていいかわからなかったんだろ？」

勘違いでも何でも自分を助けてくれたヤツを殺すことに抵抗があったんだ！」

突き出されたナイフが頬をかすめる。

冬月がかわしたわけじゃない。少女がわざと外したのだ。

少女はくやしそうに唇をかみ締め、うめいた。

冬月の目には真珠のようにきらっと光る何かが見えた気がしたが、少女がさつと身をひるがえし

走り去ったせいでそれが彼女の涙だったのかどうかは分からなかった。

灰色の十字架

トタン葺きの天井から差し込んでいた光は先細りし、やがて消えた。

代わって月が支配する夜の世界が、化け物の跋扈する時間が訪れた。力尽き、冬月はなすべも無く頭を垂れた。

少女が去ってから何の音沙汰なく、恐怖はしばむように小さくなっていた。

だからと言って希望が出てきたわけもなく、手を縛る縄はさるぐつわのように簡単には外れなかった。頭の中には友人や親、知り合いの顔が出てきては消え、出てきては消え……
たいして恩も感じていない教師の顔さえ懐かしく感じるのだから妙な話だ。

このまま餓死するならそれはそれでいいかもしれない。

生きたまま内臓を屍食鬼グールにあさられることに比べればの話だけど。

目の前をどこから舞い込んだ蛾が舞う。

その毒々しく、それでいて美しいとさえ感じる模様に小さな癒しを見つけた。

似てるかも。

俺を殺そうとし、そして出来なかった少女の顔をボンヤリと思い返す。

グーラという屍食鬼の雌だと言ったあの娘こ。

雑に扱われているにも関わらず流れる滝のように涼やかな黒髪、あつさりと軽やかなのに人の耳に強く残る声、そして感情に合わせず千差万別の表情を見せる瞳。

ひらひらと舞っていた蛾が突如天井めがけて羽ばたいた。

冬月がひょいと顔を上げるとそこにはグールが3匹と少女が立っていた。

内2匹は少女の脇につき、従順な牧羊犬のように追従していた。

残る1匹は右目がつぶれて恐ろしい風体をしている。共通点と言えば3匹とも大型犬よりもかなり大きいことだ。そして右目の無いグールはとりわけでかい。

少女の脇にいた1匹がずっと冬月の背後に回り、ぎりぎり、という音をたてた。

縄を噛み切っているのは手にかかる生暖かい吐息でわかった。やがて自由になった手もしばらくは感触がなかった。

「立て」

低い声で少女が言った。

冬月がふらふらと立ち上がろうとしたがつまくはいかない。何時間も座らされていた彼の足が立ち方を忘れてしまったかのようにだった。

「付いて来い」

冬月が立ち上がったのを見て少女は短く言った。

前に少女と右目の無いグール、後ろは従順な、たぶんまだ若い2匹のグール。

奇妙な行進は冬月が監禁されていた廃工場を後にした。

ここが何県のどの町のどの山なのか、冬月にはさっぱりだった。

工場を出てからは延々山を歩き、洞窟が見えてきてそこに向かっていると分かったときは正直ほっとした。

前を歩くグールが突然立ち止まり高く長く遠吠えるをすると、返事を返す様に遠吠えが返ってきた。

そして少女と3匹そして冬月は巨大な怪物のようにはかっと口を開けた洞窟に足を踏み入れた。

・・・#・・・

中は以外にも人の手が行き届き、少なくとも山の中よりかは歩きやすかった。

そういえば・・・。

冬月の脳裏には総合の時間にクラスで訪れた防空壕がありありとよみがえっていた。

ここはどこかの防空壕の名残なんだな、と冬月がぼんやり考えていると

どん、と背後からグールに小突かれた。早く歩けということらしい。分かったよ、と笑い掛けると小突いたグールはぎょつとしたように飴色の目を見開いた。

冬月にもなぜ今の自分がグールに笑い掛けるような余裕があるのかわからなかった。

もう自分の生き死にが自分の手におえる範疇を超えていることを何となく悟ったのかもしれない。

媚びるでもない、ただただ笑いという感情にまかせた笑みはなぜか若い2匹のグールの

動揺を誘ったらしい。そんな2匹の様子をしばらく見ていたかったが、

「入れ」

という少女の声に引かれて前を向き、狭い入口をくぐって部屋の中に入った。

部屋の中は獣特有の匂いが充満し、思わず鼻を止め、口呼吸に切り替える。

天井は冬月が手を伸ばせば届きそうなくらい低く、隅には毛布が積まれていた。

もともとは倉庫であつたのだろつと思われる部屋には右目の無い

グール、少女、

そして新手のグールが堂々と横になっていた。

毛色よりももっと濃い灰色の毛で額に十字の模様が浮かびあがった虎ほどの大きさのグール。

グールって以外と犬に似てるななどという冬月の甘い考えはそのグールを見た瞬間に消えうせた。

犬どころか人間だってそう簡単には得られないであろう威厳と威圧感をひめたその姿に思わず立ちすくんでしまった。

「名乗れ」

少女の声がなければいつまでも黙っていただろう。

呪縛の解けた冬月はすつと息を吸い込み、口を開いた。

グールが人間の言葉が分かるのかどうかなど考える必要も無かった。

十字を負ったグールは森羅万象を知り尽くした賢者のような静かで澄んだ目をしていたのだから。

「ふ、冬月氷善ふゆいぜんです」

何の反応もない。ただ、視線が向けられるだけだった。

冬月はそれを言葉が続けよ、という了承と解釈して再び口を開いた。

「俺は一体どうなるんですか？教えてください」

冬月の後ろで右目の無いグールがさつと立ち上がったのが気配で分かった。

目上の人に尋ねるのは無礼とされる。

ただ、冬月は無礼を覚悟で尋ねたのだ。どうしてもしておきた

かったというのが1つ。

もう1つは、もし無礼ならば少なくとも礼、無礼のある・・・秩序ある社会ということになる。

野蛮なだけならばどうしようもないが、秩序があるならば、と考えたのだ。

少女が十字のグールのそばに寄り、ひざをつく。

十字のグールが冬月に視線を向けたまま、ぐぐぐつとなにごとか声を絞り出す。

「《1匹が凶暴だからといってその種全てが凶悪であると考えるほど我らは愚かではない》」

少女が何の抑揚もなく話す。

「《したがって人は我らの敵ではあるからといってそなたが敵であることにはならない》」

足の骨が抜けたようにふらつとなる。

冬月は自分がまたしても無意識に息を止めていたことに気づいた。

助かった。たぶん、というか絶対このグールが親玉だ。

親玉のお墨付きなら俺は・・・俺は、助かる！

許されるならばグールに抱きつきたい気分になくなった。

「《ただ》、」

少女が再び口を開いた。

「《そなたは人であり、我らの食料源であることには変わらない》」

少女は薄笑いを浮かべ、冬月を見た。

ざまあみると言わんばかりの笑みは冬月の胃の中に氷をぶち込んだ。
十字のグールに視線を向けるが、その全てを見透かす目を見てい
ると逆に不安が積み重なっていく。

背後でざりっという音がし、振り返ると右目の無いグールが腰を
上げていた。

残った左目で、いま殺りますか？と無言で聞いていた。

息が上手くできない。腕の震えが止まらない。汗が滝のように流
れ落ちる。

十字のグールが話は終わりだ、と言わんばかりに視線を下に向け
重ねた前足の上に大儀そうに頭をのせた。

背後からせまるのは間違いなく死神の足音だった。

窮鼠の意地

足元の砂をすくいあげる。勢い余って岩でこすった手の指から血が飛んだが無視する。

冬月はその砂を右目の無いグールに投げつけた。

さつとかわされ、右目の無いグールが歯をむき出し毛を針金のように逆立てて唸り声をあげる。

入口にはその声を聞きつけたのか、複数のグールが集まってきた。しかし、右目の無いグールの一声で

それ以上は立ち入ってこない。

額に灰色の十字の模様のあるグールは片目を開き、突如はじまつた生き残りをかけた余興に目を向けた。

少女はナイフを抜いただけで十字のグールのそばを離れようとしていない。

事実上の1対1。それがグールしきたりなのか、右目の無いグールの意地なのかは分からないが冬月にはありがたいことだった。

こつんと足元に何かが当たった。目を向けると抜き身のナイフ。少女の武器だ。

余計なことは考えずそれを拾い上げ、両手で構える。

牽制などする余裕も無い。冬月はその場から一切動かない・・・動けないのだ。

対するグールも怒り心頭といった様子だが、ゆつたりと歩みだされる足取りは

獲物を狩るハンターの微塵の油断の無いそれだった。

冬月の手に握られるナイフよりもするどい牙が2本のぞき、そのざらりと光る各3本の爪の前ではダイヤも紙も大差ないようにさえ思えてくる。

動いたのは冬月だった。

右目の無いグールがすつと足をあげた刹那、わああああー！と叫びをあげ突進する。

まさか向かってくると思っていなかったらしく、完全に冬月がふいをついた形となったが

グールはさつと横に体重を逃がすと渾身のつきを受け流す。

冬月の横目とそれを正面から受ける右目の無いグールの視線が交差する。

冬月にはグールがぐつと足をばねのように曲げ、飛び掛ってくるのが一連の動きとなって見えた。

ナイフを横に滑らすが、その前肩をどが、と突き飛ばされた。

仰向けになり、それでも握り締めていたナイフも右目の無いグールの前足が手首にずん、と乗せられると、思わず、縄でこすれたときの傷の痛みで放してしまった。

だらつと舌をだし、は、は、と息を吐きながら右目の無いグールが冬月の目をのぞきこむ。

単に品定めをしているだけかもしれない。

うおー！と突如右目の無いグールが叫び声をあげた。

恐怖が不安とともにせりあがってくる。胸に乗せられた前足からのぞく爪を見て涙がこぼれる。

歯軋りの音が自分の口から聞こえていることに気づいたのはそのときだった。

何が悔しいのだろうか？助かるとでも？勝てると思うてたのか？武装した陸自隊員でも殺すような化けもの相手にナイフ一本で！？

「《その意気や良し》」

少女の風のような声が聞こえてきたのは突然だった。

冬月が顔だけを向けると地面に転がるナイフを鞘にしまいながら、なぜかくやしそうに

唇をかみ締めていた。まるで自分が負けたとでもいわんばかりだ。

「アルフ殿が言ったのよ、わたしは通訳」

何か悪い？と言いたげに少女は挑むような視線を冬月に向けた。

右目の無いグールはひょいと冬月の上から飛び降りると何事かを少女に吠えりと

十字のグールにぺこつと頭を下げて部屋から出て行った。

「《わが武器総計》8。そなたは1。勝てぬは道理》・・・だそうよ」

仰向けのまま、状況が読めずにぽかんとするしか冬月にはできなかった。

少女は十字のグールのそばに寄り、何か話を聞いている。

話が進むにつれ少女は眉にしわをよせ、不満げな様子は隠しようもないほど露骨になる。

それでも最後に「分かりました」と言つて頭を下げたときの口調は丁寧だった。

十字のグールが涙と鼻水と困惑でばんぱんになった冬月を悠然と見、

そして歯をむき出した。冬月の背中には冷たい汗が走ったが、それがグールなりの笑顔なのだと気づいき、ますます困惑させられることとなった。

今殺すのではなく、肥やした後でおいしくいただくつて魂胆か？

「いつまでそうしてるつもり？それと、みっともないから顔ふきなさいよ」

返事を返す気にもなれず、は？と言いつ返す。

少女はきつと冬月をにらみ、はあ！？とさらに強い口調で吐き捨てる。このまま横になってたら

蹴り殺される恐れが出てきたので袖で顔をくしゃくしゃにぬぐいながら立ち上がる。

少女は右目の無いグールと同じように十字のグールに頭を下げてさっさと部屋をあとにした。

冬月もそれにならって頭を下げる。

十字のグールは人の言葉がしゃべれたら「頑張れよ」とでも言っただろう。

ふさふさの尻尾をぴくんと一瞬立て、寝る体勢に入ってしまった。

少女のあとに付いてくねくねと蛇の通り道のような道をずんずん進む。

とんでもなく暗い上、少女は容赦なく進むせいで冬月は壁にぶつかるやら転んだやらで傷だらけになった。

「アルフ殿もアルフ殿だけど、アダム様もアダム様よ」

少女はぶつぶつと独り言をつぶやきながら地面をたたきつけるように足を進める。

今になってやっと自分は助かったのだろうか？と思い始めた冬月は背後からぞろぞろと飴色の目を

ぎらぎらさせながらついて来るグールの群れをなるべく見ないようにしながら、前を行く少女と距離が

出ないように必死だった。遅れたら食い殺されそうな気がしたのだ。

「アルフって、だれ？」

何か話さないと気がおかしくなりそうだった。

少女は足を止めることもなく、相変わらず怒りをまわりに放出しながら進む。

無視を決め込んでいるらしく、間違いなく聞こえているのに返事はない。

その時、背後から突然吠え声が高々とあがった。
次々と大合唱のように続く。

グールの群れははしゃぎながら少女のまわりをぐるぐる回り、冬月のまわりを回り、

生まれたての子羊のように跳ね回った。その間も吠え声は止まない。

「なんて？」

おそろおそろ少女に尋ねる。少女との距離をぐつと近づけたのは単に恐怖を感じたから。

少女はそんな冬月を下心でもあると感じたのか、眉をひそめ、たたつと距離を開けた。

「《馬と鹿の勇者、馬と鹿の勇者》・・・」

「・・・」

「馬鹿って言われてんのよ！」

きつと、指が切れそうな鋭い視線を冬月とグールに向け怒鳴る。

グールの群れはわつと逃げ出した。近所のカミナリ親父に怒られた悪がき集団のようだった。

「これだから若いやつらは」と自分も”若いやつら”の範疇であることを棚にあげて

ぶつぶつと文句を言っていた少女はふいに姿を消した。

慌ててあたりを見回すと、どうやら洞窟の中の一室に入っただけらしい。

死闘を繰り広げた部屋と比べてもずいぶん小さい。狭い、ほこりっぽい・・・と

イイとこなしの場所だ。どの部屋にも共通らしいが扉のようなもの

はない。

グールにプライバシーという言葉は存在しないのかもしれない。

「じゃ」

短くそれだけ言うと、お役目ごめんとばかりに少女は暗闇の中に消えていった。

冬月はしばらく立ちすくしていたが、もう脳も身体も限界。

部屋の隅に無造作に置かれた毛布を枕にして目を閉じ、朝になったらあの世でした、

とならないことを祈りながら目を閉じた。

滅却される希望

「いつまで寝てんのよ」

母の胎内よろしくの安穩とした夢の世界から冬月を覚ましてくれたのは、少女の容赦ない蹴りだった。

げしげしといつまでも蹴られるので、イヤイヤながらもぼんやりとした頭で冬月が立ち上がると

突然水攻めにあつた。正確にいうと少女が桶の水を冬月の顔めがけてぶちまけたのだ。

水も滴るいい男・・・どころではない。ただ、目覚まし時計よりも効果はあつた。

「付いてきて」

お願いというよりも強制であり、そもそも冬月に拒否権などあるわけもなく、またしても少女のあとについて洞窟探索に出かけることとなった。調理場に連れて行かれないことを祈りながら・・・。

時折、灰色の毛並みのハイエナのような屍食鬼グールとすれ違う。

少女には「おはよう」というように親しげに身体を擦り付け、冬月には歯をむき出しして

中には唸り声をあげるグールさえいた。やっぱり俺は敵視されているのだろうか？そんな

不安と恐怖に苛まれながら、冬月は胃の中にずっしりとした鉛を抱えたまま歩き続けた。

やがて洞窟の行き止まりまでたどり着き、錆びつき、もはや意味を成していない扉を押し開けて

少女は闇の中に歩を進めた。しばらくしてぱちっという軽い音とともに裸電球のぼんやりとした

明かりがその部屋を照らした。

心臓が止まる。部屋の中に人が大量に吊るされてる！

明かりに目が慣れるとそれが服だと分かった。もちろん中身は空。まだ、心臓はほんと肋骨を叩いているが、それを無視して冬月も中に入った。

「いつまでもその格好じゃ動きにくいでしょ。着替えな」

差し出されたのは軍服。しかもこれって旧日本軍の。

確かにジーパンよりかは動きやすいだろうけど・・・けど！

軍服に一瞥し、冬月は少女の挑むような視線を正面から受け止める。

「俺は一体どうなるんだ？」

つかみかかり、揺さぶってでも答えを聞き出すつもりだった。

少女は軍服を持った手をずっと下げ、怒りとはまた別の挑発的な目つきで冬月をにらんだ。

息苦しい時間が続き、折れたのは少女だった。

盛大なため息をつくと軍服を放り、どかっと腰をおろした。話が長くなるということか？

冬月もすつと腰を降ろした。

「・・・今すぐに殺されることはない。

アルフ殿があんたの身の保証をしてるから」

「アルフ・・・殿？」

少女は「ああ」とつぶやくと、大儀そうにまたため息をついた。

「あんと闘ったグールがアルフ殿。
ちなみにこの群れのボスがアダム様・・・額に十字型の模様のあ
る方よ。」

「くれぐれも失礼のないように」

「失礼なんかできるわけない」

独り言のつもりで言ったが少女の耳に届いたらしい。

それもそうね、と可笑しそうに笑う。冬月にすれば笑い事ではない
のでむすつとしていたが

もし、その笑顔で無心で見ていたらかわいいと思ったかもしれない。

「安心して。アダム様とアルフ殿の目が黒いうちは誰もあなたに手
出しはできないから。」

それと・・・敵は逃がすか、殺すか。どっちかよ。」

さらつと言い放たれた言葉は冬月の耳に入り、希望へと形を変えた。
殺されなかった敵は、逃がされる、つまり助かるんだ。

顔に出したつもりはなかったが、少女が眉をひそめたのを見て冬
月は表情を引き締め咳払いをした。

だが、少女の顔にみるみる暗雲がかかっていくのにつれて不安が
また首をもたげはじめた。

「なに？」

沈黙に耐えかねてついに冬月は口を開いた。

「わたしのミスよ。」

あなたを殺すな、と言ったのはわたし。でも、わたしたちに敵を
捕虜にする習慣はないの。

だから、どうしていいか分からなくて仕方なくあなたをここに連れて来たんだけど・・・」

「見ちゃいけないものを・・・知っちゃいけないことを俺は知ったわけ、か」

どこにグールの隠れ家があるかを陸自に報告すれば、
例え、具体的な場所が分からなくても、冬月を生きて帰せばいつかはここの存在がばれる。

グールにとっては致命的な欠点をさらしてしまったことになる。

少女は大きく息を吸い込むとさらに話を続けた。

「この場所を知った以上、あなたを帰すわけにはいかない」

恥を拭って

「1つ聞きたい」

どれほど黙っていただろう。気が短かそうな少女さえ冬のだんまりに付き合っていた。

裸電球がじじつと音をたてる。

「なんで俺は生かさせることになったわけ？」

苦笑いさえ浮かんできた。

少女は冬月から目をそらさない。そうすることで傷つくのは自分だと分かっているのに。

自分の判断で助けたが、それが招いたのは自由の無い生活。鳥おれから羽をむしる行為だったんだから。

「あなたが逃げずに闘ったから、ね。わたしたちは特にそういうのを重んじるから。」

それと・・・生かしておいても敵とはなりえないってのも一因」

「余裕だねえ」

へへっと笑うしかできない。

「串でぶすりで、まだ死ねない。」

そのまま焼かれてまだ死ねない、喰われもせずにそのまま放置。

・・・まさに蛇の生殺し」

「殺して欲しいわけ？」

挑発的な言い方ではなく、静かな湖畔の水面を思わせるつぶやきだった。

冬月は下げた視線そのままにまた笑った。今度は自虐的な笑みだった。

ここで「うん」と言えば、実にあっさりと殺してくれるだろう。他のグールがなんと言おうが

彼女はそうするだろう。冬月のために、そして自分のために。

「死にたくない。どんな状況になっても」

少女は何も言わず。冬月も黙った。

・・・#・・・

冬月は旧日本軍の軍服とそして日本刀を携えて資材庫から出た。

「着替えたね、いくわよ」

外で腕組みをして待っていた少女がほとんど前を歩く。

その横には牧羊犬よろしくの従順さのグールが2匹。あの時の2匹だろうか？

飴色の目で冬月をじろつとにらんだが、この間のような敵視した印象は受けなかった。

「ところでさ、名前なんていうの？」

「・・・この前足が白いのがマエシロ。

こっちはペタ・・・耳のかたっぽがぺたってたれてるでしょ？だから」

「・・・」

「・・・分かってるわよ。」

サヤ。それだけ。よけいなモンつけずに、そのまま呼び捨てていいから」

サヤはマエシロとペタの頭を撫でる。

2匹はよほどサヤに懐いているのか、彼女のまわりをぐるぐる回り尻尾を振る。

その一方で冬月にはこれみよがしに牙をむいたり、噛むつもりなのか時折ぐわっと口を開けたりした。

のこぎりのようなその歯を見て、殺されることはないとわかっていてもぞつとさせられた。

一行は洞窟の外に出た。

久しぶりに会った太陽に思わず冬月は目を細め、んゝと伸びをした。

2匹のグールも前足をぐつと前に出し、猫のように伸びをする。

「似たり寄ったりなことしてないで行くよ」

うんざりしたような声でサヤが呼ぶと、2匹はさつと彼女の元に寄り冬月はその後ろからのっそりと付いて行った。

「何しにいくの?」

「食料調達」

枝葉を掻き分けながらサヤは振り向きもせずにあっさり言い放つ。
冬月の足がぴたつと止まる。

サヤが振り返った。

「人間だっていつも肉喰ってるわけじゃないでしょ？
わたしたちもそうよ」

にこつともせずにサヤは言うど、野いちごをちぎって口に運ぶ。

冬月はほっと胸を撫で下ろし、ふうと息を吐くと、マエシロがな
さけねえなと言わんばかりに

オンツと吠えた。口元が血まみれなのは野うさぎかねずみでも喰っ
たからだろう。

そう言いながらも人里に下りて来た時は、話が違っじゃねえかと
思わずサヤをにらんでしまった。

冬月の地元の町ではないが、民家とスーパー、コンビニの並ぶそ
こそこにぎやかな場所。

2人と2匹はちょうど町を見下ろす形で立っていた。

サヤとマエシロ、ペタはぼそぼそ何事が話してる。

「・・・あんたたちは見張りね。うん。遠巻きにいいから」

サヤは2匹から手を放すと冬月に目を向けた。つーんとすました顔
をしてる。

冬月はいざとなれば刀を抜く覚悟でいた。

「何する気だよ!？」

こんな人がいるようなトコに降りてきて」

「しつこい！人狩りするわけじゃないっていつてるでしょ!？」

イチゴ狩りみたいに言うな！

「あなたの仕事は、下に、降りて、人目を、ひくこと！それだけ！」
もういいでしょと言わんばかりにくるつと背を向け、サヤは急な斜面をくだり降りて行った。

いらいらが頂点に達し、意地でも動くもんかと腕組みをしてどかつと腰を落とす。

マエシロとペタが飴色の目をぎらぎらさせ冬月を取り囲むが、ここは譲れない。

どんな状況でも人を狩るなんて絶対にしないし、できない。それが冬月の意志だった。

「・・・なんだよ」

鼻面でぐいぐい押してくる。

「落ちるだろ。止めるよ」

意外にも2匹はすつと引き下がった。

と、突然赤いマントに突進する猛牛のように体当たりをくらわせた。

驚き、腰をあげようとするがそれよりも早く衝撃が身体を駆け抜ける。

顔を上げたとき、ばちつと人と目が合った。

いきなり坂から転がり降りてきた軍服姿の少年。注目を引くには十分すぎた。

脱出のチャンスとも思えたがサヤの言葉が脳裏を駆ける。

【・・・あなたたちは見張りね】

背後からグールたちの尋常じゃない殺気をびりびり感じる。

助けを呼ぼうものならのどを食いちぎられる。本能がそう告げた。冬月に出来たことは裾を破って巻きつけ、顔を隠すことだけだった。

「誰？撮影？」

「ね、あの刀って本物？」

「それ取ってよ。シャメ撮るから」

水面に落とされた水滴はあちこちにさざ波を起こし、ついには警察官まで出てくる始末だった。

逃げなくては。冬月の刀を見てか、腰の拳銃に手を掛けてじりじり迫る警官の前に

引き際を計っていたその時、群集のはるか後ろで手に何かをかかえたサヤが見えた。

冬月に一瞥するとサヤはさささと走り去る。

それを合図だと勝手に判断し、冬月は背後でうつそつと茂る山中に身を投じた。

崖こそ急で登れないが、いつの間にか降りてきていたマエシロの付いて来いという視線を受け

後に続く。後ろから誰かが付いてきているかなど気にする余裕も無かった。

どれだけ走っただろうか。

「何やってんのよ！」

というサヤの理不尽な怒りに言い返す気力が失せるほど疲れ果てていた。

「ぼーっと木みたいに突っ立って！刀振り回すとか奇声上げるとかできないの！？あんだ」

サヤは袋をどさつと地面に落とし、中から弁当を取り出すとがつがつ食べ始めた。

マエシロ、ペタも裂きイカとビーフジャーキーを器用に取り出してがつつく。

万引きも犯罪は犯罪だけど人殺しじゃなくて良かった。

冬月も弁当に手を伸ばすと、マエシロにがぶつと噛まれた。

甘噛み、といっても血は出たし、情けない悲鳴をあげてしまった。サヤはふんつと鼻をならし、袋を冬月から遠ざける。冬月に分けようという気はまったくないらしい。

「明日もやるから。今度はもっと上手くやんなさいよ」

その言葉とともにドロップの缶が投げられた。

それがこの日の彼の朝、昼、夜食になるなど、神様だって知らなかっただろう。

派閥

グール
屍食鬼。

人類の天敵としてその名を馳せ、灰色の毛並みと飴色の目。ハイエナに酷似した形態を有する生物。

ちなみに雌のグールをグーラという。

かれらの寢床を知ってしまったために軽い軟禁状態で生活をともにすることとなった高校生、

冬月氷善。
こひづる

最近では自分はグーラだと名乗る少女サラ、その従者的なグール、前足の先の毛が白いマエシロ、

かたつぽの耳がぺたつとたれてるペタとともに人里におりて万引きにいそしんでいた。

同じ町でやると待ち伏せさせるので、あちこちの町にくりだしては犯行を繰り返していた。

どこぞの山の元防空壕を拠点としているので必然的にかなりの距離を歩くことになる。

山伏のような生活（万引きを除けば）をしていると足腰も精神も鍛えられるもので

愚痴も文句も言っても無駄だと悟り、黙々と作業をこなせるようになった。
まんびき

万引きといってもやってることはサヤがモノをかつぱらう時間稼ぎのために人目を引くだけなのだが。

すさんだ生活だが、楽しみがないわけでもない。
その1つが温泉。

洞窟からしばらく歩くと、ふいに現われるそれはまさに秘湯だった。

木立に囲まれ、マイナスイオン全開の雰囲気の中を月を眺め、のんびりと裂きイカを食べる……。

冬月の至福の時。

監視のマエシロとも裂きイ力を分け合う仲になり、言葉こそ交わさないが呼吸が合うようになった。

毎日の日課として今宵も浸かっていた。

「食べるか？」

目を細めて月を眺めていたマエシロに裂きイ力を差し出すと、冬月の手をぺろつとなめ、マエシロはイ力を頬張る。冬月も裂きイ力をもぐもぐと噛み、湯の温かさに浸りきっていた。

温泉には入らずイ力をくちやくちやと噛んでいたマエシロがふいに耳を立てた。

飴色の目が木立の中に向けられたが、警戒の色は見受けられない。やがて現われたのはペタだった。

「珍しいなお前も来るなんて」

マエシロと距離が近くなるにつれて、彼とよく行動をとみにしているペタの態度も軟化していった。

もしかしたら俺のことを話してるのかな？グールたちは仲間同士、横のつながりがとても強いからそれもありえるな、と冬月は思っていた。

さすがに撫でるまでは恐くてできないが、グールの、身体を擦り付ける挨拶にもそれほど抵抗を受けなくなっていた。

だが、ペタに続いて現われたサヤには驚かされた。

サヤは露骨に眉をひそめた。

「なんているの」

疑問ではなく嘆き。ため息までついた。

そんな言い方をされれば冬月もさすがにかちんとくる。

「ここは皆で共有する場だろ？いやならそっちが出てけ」

もつともだとマエシロがくつくとのどを鳴らす。

「俺は出る気ない。疲れてんだからな」

「はあ！？あんただだ立つてるだけじゃない。なぐにが疲れてるよ、
案山子^{かし}のほうか

よっぽど役に立つわ」

「あせって弁当落としたのはどこのだれっだけ？」

サヤの顔がかくつと赤くなる。

今日、転んで、盗んだ商品の大半を落としてしまったのだ。

「いいわよ！入ってなさいよ！
のぼせて死んでしまえ！」

言うや否や服を脱ぎ始めた。

血が昇って赤くなつたのがサヤなら血がひいて青ざめ、そして赤
くなつたのは冬月だった。

不意打ちだったせいで目をそらす間がなかった。冬月は慌てて明
後日のほうを向いたが

しばらく忘れられないであろう光景に心臓はパンク寸前にまで激し
く動いた。

なにしろサヤは、冬月のまだ十数年の短い人生の中で見ても飛び

ぬけて綺麗な娘だったからだ。湯でしつとりとなり、濡れ羽色に光る黒髪が湯面に漂う姿はどうしようもないほどの色気があった。白くて小さな肩が上下してるのはおそらく怒ってるから・・・だろう。こつなつたら何を言っても悪態で返されるのは経験済みなので冬月も黙って湯に浸かってた。

月明かりのもとで2人は沈黙を守り続けた。

「あのさあ」

裂きイカをめぐってじゃれ合うマエシロとペタを見、サヤのほうを向かないようにして

冬月はぽつと切り出した。返事はないが沈黙を了承として続けた。

「俺はさ、しばらくグールとすごしてきたわけだけど、

人を襲ったり・・・殺したりするとこ見たこと無いんだよね」

「・・・」

「もしかしてグールって人は喰わないんじゃないの？」

鹿や猪をがつつくのは何度か見た。しかし、人を食べるところは一度も見たことが無い。

だけど、グールが人肉をむさぼり、食い漁る写真はTVで繰り返し放送されていた。

合成はありえない。そんなはずらだったら政府が陸自を動かすわけも無い。

だとするなら・・・俺の前だけやってないってだけの話なのか？

「期待を裏切って悪いけど・・・グールは人を襲うし食べるわ」

サヤの声は例によって耳に強く響いた。嘘をつく性格でないことがここ最近で分かってきただけに頭に殴られたような衝撃が走った。

彼女のさらりとした飾り気のない声には反論も疑問もはさめなかった。

「でもね」

言葉を選んでいるのか、サヤはしばらく口をつぐんだ。

「【灰色の十字架】一派は人を、襲わない・・・自分からはね」

「灰色の十字架?・・・アダム」

「さま」

「・・・アダムさまの一派はって、どういうこと!？」

思わず振り返るとお湯ではなく拳が飛んできた。

「グールは群れのリーダー・・・わたしたちでいえばアダム様率いる【灰色の十字架】ね・・・」

で、リーダーを中心にしてそれぞれの派閥を構成してるの」

へえ、と言いながら鼻をさする。マエシロとペタがオンオンと楽しげに吠えた。

「リーダーの方針と合わなければ出て行って勝手に新しい派閥を作れることもできる・・・けど

だいたい血を伴うわね。

ある日、アダム様は人を襲うなと命令をだしたの。でも、ものすごい反発にあって……」

サヤのほうを見たわけではないが彼女の悔しさが手に触れられるほど濃厚になった。

「力でねじ伏せることもできたのに、アダム様は穏やかな方であるから……

去るもの追わずで放っておいたの。

だから少なくとも今の【灰色の十字架】一派は、人間のほうが攻撃してこない限り自分からは襲わない」

そういうことか。冬月は深く息を吐き出した。

でも、アダム様が人間を襲うなって命令を出したのはやっぱりサヤが原因なのか？

雌のグールだとサヤはいうけど、さっき……その、見た限りどう考えても彼女は人間だ。

とんがった耳も、尻尾もないし。

「……人間を積極的に猟奇的に襲ってるのは【蒼の棘】とか【赤い月】、【蠢く影】一派ね。

どいつも！こいつも！元はアダム様に尻尾振ってた連中よ！！なのに……！」

ばちゃ、ばちゃ、と力任せ湯を叩く音が響く。

マエシロとペタがくんくんと鼻を鳴らす。

サヤは温泉の端に寄ると2匹をぎゅっと抱きしめた。

「……あいつらは出て行くときにアダム様に言ったのよ、《腰抜け》ってね。

いつか思い知らせてやる。【灰色の十字架】がどれほど強いかを・
・・!」

サヤの、声を詰まらせながらの吐露に冬月はただただ黙り込むしかできなかった。

彼女の怒りと悔しさを生み出す原因の深部には何があるのか。
それを直接聞けるほど、サヤと冬月の距離は近くはなかった。

娘

今朝もいつものように万引き行脚に出かける準備をしていると、突然吠え声がした。

マエシロかペタのどちらかだろうと、顔は向けず手を振って答える。

「待ってくれて、刀はちゃんと磨かないとすぐ錆びるんだよ」

オン、オン。

「待てって！ほら、裂きイカやるから」

イカと手、両方がぶつとやられた。

跳び上がって振り返ると、心臓が止まった。

右目の無い屍食鬼^{グール}、アルフがいた。普通のグールよりも一回り大きいせいか

ただでさえ迫力のあるグールの中でアルフは飛びぬけて恐ろしい存在だった。

アルフと闘った冬月が、馬鹿がつくとはいえ勇者と呼ばれていることでも分かるだろう。

冬月は噛まれた手の痛さも忘れて固まった。

「《付いて来い・・・無礼者》だそうよ」

サヤの冷徹な声とアルフの視線が突き刺さり、出せたのは、

「・・・はい」

我ながらずいぶん情けない声だ。冬月はそう思った。

・・・#・・・

「《裂きイカか。アルフ、お前の好物じゃないか》」

「《余計なおまけがついてましたがね》」

サヤは淡々と訳す。

冬月、サヤ、アルフは【灰色の十字架】アダムの部屋にいた。

この洞窟の中でも特別快適とも言えない部屋だが、主のせいここには威厳が満ち溢れていた。

アダムは布団と毛皮の上でくつくと可笑しそうになる。

「別に今の会話訳す必要なかったんじゃない・・・」

「・・・」

さて、というようにアダムが冬月に向き合った。

サヤの話だと人を襲わないと宣言したグールで、穏健派のはず。

ぎらぎらした他のグールたちの飴色の目に比べるとアダムの琥珀色の目は戦士というよりも

本を片手に知識を求める賢者のそれに近い。

「《本題に入ろうか。ゼン、最近よく頑張っているそうじゃあないか。」

食卓に華が添えられて嬉しい限りだ》」

「あ、ありがとうございます。」

・・・あの、ゼンってわたしのことです、よね？」

アダムが問うようにまばたきした。

「《冬月氷善ひょうぜんだからゼン。何か不都合でも？》」

「め、滅相もない！とてもすばらしいネーミングセンスだと思われます」

「《支離滅裂だな。慣れん敬語など使うからだ》」

背後から唸り声が聞こえたのと、サヤがにやっと笑ったのとでそれがアルフの声だと分かった。

冬月は咳払いをして居住まいを正した。

「《まあ、2人はさておき。サヤとゼンに改めて頼みたいことがある》」

サヤにも初耳だったらしく少し目を見開いた。
そんな彼女を尻目に口を開く。

「はい」

。「《実は【白い鴉】ジュピター様がここを訪れることになって・・・。

鹿や熊の肉でもいいんが、ここはどーんと牛肉を考えていてな》」

「つまり牧場から牛をかつぱらってこい、と？」

くっくとアダムはのどを鳴らした。

「《人間の兵たちが警備を固めておるからそれは難しいだろう。ま、できるに越したことは無いが、止めておけ》」

ここでサヤは突然訳すのを止めた。

むっつとしばらく黙っていたが、しゅしゅ、本当にしゅしゅと口を開いた。

「・・・《サヤと2人でなにか妙案を出してくれ》」

なるほどね。だからしゅつたわけか。冬月がサヤをちらつと見るとぷいとそっぽを向かれた。

温泉でサヤの吐露を聞いて以来、ますます距離が開いてきたような気がしていた。

こんな状態で妙案などでののだろうか？不安の尽きない冬月だった。

・・・#・・・

なにやらただならむ雰囲気で話し合うアダムとアルフを残し、部屋を後にし、

冬月とサヤは洞窟の奥へと向かった。

冬月がそうしよつと言ったわけではなくサヤがずんずん進むので仕方なく付いて行っている、というのが真実だが。サヤは話しかけるなオーラを振りまきながら進む。

やがてある部屋の中にふいに消えた。

おそらくサヤの部屋だろな、と思いつつ冬月が入っていいものかどうか悩んでいると

「ぐずぐずしてないで、さっさと来い！」と噛み付きそうな怒鳴り声がとんできた。

中は冬月の部屋とたいして違いはない。少々広いくらい……だが、決定的に異なる点があった。ヤカン、携帯コンロ、バーナー、チャッカマン……それと本。なぜ?と思うものがあつた。

「なにきよろきよろしてんのよ」

「いや、別に……>我輩は猫である<?読むの?こんなの」

「触るな!」

冬月の手から本を奪うと大事な玩具を手にした子どももみたくぎゅつと抱きしめ、サヤは背を向けた。

ガキじゃねえか、と心の中でつつこみ、冬月は勝手に腰をおろさせてもらった。

サヤも本やらなんやらかんやらを毛布の下に隠すと座り込み、ヤカンの水をがぶ飲みしはじめた。

忘れられたようにコップが置いてあつたが、サヤはそれに注ぐとかいう気はゼロらしい。

「……で、なんふあいいくわあんがえあんの?」

「水飲みながら話すなよ。」

「……ところでサヤってさ、洞窟（くわい）でずっと暮らしてんの?」

関係ないね、とふんとサヤは鼻をならした。

「……そうね。気が付いたら屍食鬼（みんが）がそばにいたわね、うん。」

小さいころはよく父さんの背中に乗って色んな場所にいったなあ

」

目を細め、サヤは思い出の世界に浸りきっているようだった。

「父さん？」

ぼわわんとした雰囲気を漂わせ、サヤは遠くを見つめたまま口を開いた。

「アダム様に決まってるでしょ」

「ふうん・・・」

冬月にはそれしかいえなかった。

サヤが本心で言っているのか否か、そして父親^{アダム}のことは言っても母親のことまで言わないのは故意なのか。

これ以上踏み込むと地雷を踏むどころの問題じゃなさそうだと冬月は判断した。

「アダム様と言えば、アルフさんと何はなしてたんだろうな？」

この話題も地雷だと気づくのにそう時間はかからなかった。

サヤのふわつとした笑顔は一瞬で曇った。それどころか土砂降りになった。

「【白い鴉】ジュピター様はアダム様の古いご友人でいらっしゃるの。」

穏健派のとても優しい方よ」

こんなどこにも怒りをかきたてるような内容の無い話なのに、サヤ

はみるみる不機嫌になっていく。

「ただ派閥の規模が小さくて戦士の数も少ないから、過激派に常に狙われててね」

「ああ、つまりアルフさんはその道中護衛つてわけか・・・あ、もしかして護衛隊に入りたかったんじゃない」

話の腰を折ったことと、なにより凶星だったことが複雑に入り混じり、サヤの出した結論は

冬月を部屋から蹴り飛ばすことだった。

その日、いくら冬月が誤ってもサヤは一言も口を聞いてくれなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4842p/>

夜を駆ける

2010年12月14日00時55分発行